

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <http://www.bpcj.or.jp/>

テレビ美術の作り方 -テレビ朝日 デザインのシゴト展-

2月22日～4月7日、「テレビ美術の作り方 -テレビ朝日 デザインのシゴト展-」を開催した。音楽・報道・ドラマ等、テレビ朝日の様々な番組のセットデザインの魅力を、VR等最新技術を交えながら紹介した。また3月10日には、美術デザインの面から、音楽やバラエティー等各分野の番組制作の舞台裏に迫るセミナーも開催した。

企画展では、画面では伝えきれないテレビ朝日の番組デザインの魅力を、ジャンル毎の五つのエリアで紹介した。

音楽番組エリアでは『ミュージックステーション』（以下『Mステ』）のセットを、実物のLEDの電飾パネルを使用して再現。光るステージの上で、子供から大人まで幅広い世代の来場者が、司会者や歌手になりきり、音楽番組のステージの雰囲気を楽しんだ。



報道番組エリアでは『報道ステーション』のセットを再現。ゴーグルを装着すると360度のスタジオ画像が映し出されるVR体験により、スタジオにいる気分を味わえるコーナーになった。

スポーツ番組エリアでは、サッカー中継や世界水泳等でおなじみのCG技術について解説。フィギュアスケートの大会中継に登場するキス・アンド・



クライを再現したセットでは、多くの来場者が写真撮影を楽しんだ。

ドラマエリアでは『リーガルV』に登場した法律事務所のセットを再現。テレビではじっくり見られない小道具を間近で見ることで、デザイナーのこだわりを感じとれる展示となった。

会期中に春休みを迎えたことや、体験型の展示もあったことから、家族連れの来場者が多くみられた。

■公開セミナー

『Mステ』の舞台裏とセットのこだわり

【登壇者】

藤沢浩一（『Mステ』演出／テレビ朝日）

井磧伸介、森永牧子、小山晃弘、

村竹良二（美術デザイナー／テレビ朝日・テレビ朝日クリエイト）

【司会】川瀬真由美（テレビ朝日広報局）



企画展関連イベントとして、公開セミナー「『Mステ』の舞台裏とセットのこだわり」を3月10日に開催した。

前半は『Mステ』の舞台裏についてトークが行われた。演出の仕事について藤沢氏は「その曲を初めて聴く人たちに、その世界観をわかりやすく届けるにはどのようにしたら良いかを考えている」と語った。その演出イメージを叶えるのが美術デザイナーの役目である。毎回複数のアーティストが出演し、それぞれにセットが組まれる。しかしスタジオ内は非常に狭く、二つのセットを同時に立てておくことはできないため、短時間でのセット転換完了という大変な作業が、美術チームに求められる。直近の放送回についても、視聴者にそうは感じさせなかったが、「時間がけっこうぎりぎりだった」とデザイナーの井磧氏は振り返った。短期間で苦心してこだわりを詰め込んだ演出やセットに対し、アーティストから「かっこいいね」等の反応があると、両氏とも嬉しいという。また、時間ぴったりに転換ができると、本番中でもスタッフは小さくガッツポーズをしていると明かした。

番組の貴重な映像や資料と裏話が満載の興味深い内容となり、司会の川瀬氏が「舞台裏をここまで明らかにするのはおそらく初めての機会」と話したほどの内容となった。

後半は、美術のデザイナーのこだわりについて、番組のジャンル別に解説が行われた。最初に、小山氏が『Qさま!!』を例に、バラエティー番組のセットデザインについて解説した。デザイナーは、一見ディレクターの仕事と思われる、ルールや解答方法といったクイズのシステム構築も担う。これは、機材の都合等も勘案する必要があるからだという。番組作りのルールとして、ディレクターから突拍子もないオーダーが来たとしても、まずは聞くという。さらに、「(オーダーが) 実現不可能ではないと思った時は、直感で面白いものが出来上がるとわかる」と述べた。

次に、森永氏が『オリンピックの身

代金』(2013年放送)を例に、ドラマの美術デザインに関して解説した。デザインの最大の難関は、舞台である1964年の東京をどう再現するか。そこでVFXという合成技術を使い、当時の風景を作り上げた。しかし予算と期間の制約により、全て合成では難しいため、その時代に関するリサーチを重ね、お手製の電話ボックスを置いてさりげなく昭和感を演出する等、映像加工以外の技も駆使して再現した。

最後に村竹氏がニュース番組と美術全体の仕事について解説した。デザイナーの役割について村竹氏は「プロデューサー等から言われた漠然としたオーダーに対し、自分なりに考え感じたものを、デッサン等得意な表現方法でプラスオンしてイメージを引き出す。イメージを実現するためには、様々な経験や人との交流を通じて、自分の引出しを沢山作る事が大事」と語った。



さらに、「デザイナーは設計図を作るだけでなく、それを元に様々な分野の人たちとコミュニケーションを取り、動いてもらう必要がある。番組に関わる人々を取りまとめることもデザイナーの役割」と続けた。

視聴者は、画面に映った一部分しか見ることができないが、裏では多くの人と創造力が結集してテレビ番組が成立していることを、強く感じさせるセミナーであった。

■2019春の人気番組展



4月19日～6月2日、地上8局、BS7局の協力を得て、恒例の「春の人気番組展」を開催した。各局の新番組や人気番組のポスター、台本、関連グッズ、番組で使われた衣裳、セット模型、デザイン画などを展示した。前回の番組展に引き続き、新4K8K衛星放送のPR映像の上映も行った。

展示では、フジテレビの『ラジエーションハウス』の衣裳や『ストロベリーナイト・サーガ』の模型、TBSテレビ『集団左遷!!』の模型等が会場を飾った。また、テレビ神奈川の『関内デビル』内で使用した小道具や、『猫のひたいほどワイド』のサイン入りグッズ等は、熱心に撮影する番組ファンの姿が見ら

れた。

BSコーナーには、BS日テレの新公式マスコット「バブちゅ～」の書割りが登場。BS朝日ブースでは『春風亭昇太の少年時代工房』内の企画で作られたウォッシュボードを展示、WOWOWブースではコーポレートキャラクター「ウーとワー」のグッズの展示もあり、各局賑やかなブースとなった。



来場者からは、「ドラマの台本を初めて見ることで感動した」「視聴していないドラマの情報を知ることができ、見たい番組が増えた」「テレビ番組に対する関心が湧いてきた」等、様々な感想が寄せられた。

■放送ライブラリー常設展示を改修

放送ライブラリー9階展示フロアの一部をリニューアルした。テレビ日本美術家協会の協力を得て、伊藤熹朔賞受賞作品の紹介などテレビ美術に関するパネル展示コーナーを設けたほか、日本脚本アーカイブズの協力を得て、テーマを設けた台本・脚本の展示を行った。4～6月期は「学園ドラマ」をテーマに、『飛び出せ!青春』(日本テレビ)、『3年B組金八先生』(TBSテレビ)、『中学生日記』(NHK)等、放送史に残る名学園ドラマの脚本を展示した。

また3月に、『ニューススタジオ』で体験できる番組をリニューアルし、新たに子供向けニュース、大人向けニュース、バラエティの3番組とした。



■NHK連続テレビ小説 「なつぞら」&「朝ドラ」100展

6月12日～7月15日、NHK連続テレビ小説「なつぞら」&「朝ドラ」100展を開催した。1961年に放送を開始し、最新作『なつぞら』で100作の節目を迎えた“朝ドラ”。今回の展示を通じて『なつぞら』の魅力を伝えると共に、朝ドラ100作の歴史を紹介した。

会場エントランスには、ヒロイン・なつを演じる広瀬すずの等身大パネルと記念撮影が楽しめるフォトスポット



が登場した。『なつぞら』コーナーでは和菓子店「雪月」のセットの再現や、形状の異なる発泡スチロールで作られた様々な雪を展示。来館者はそれぞれの雪を触って、違いを体感した。また、番組オープニングのアニメを制作したアニメーターによる、毎号異なるイラストが表紙になった台本も展示された。

「朝ドラ」100コーナーでは、『まれ』『花子とアン』で使用された小道具や、『あまちゃん』の衣装の展示のほか、歴代作品の番組ビジュアルをパネルで一挙公開。朝ドラの歴史を堪能できる展示となった。

また、懐かしのオープニング映像も上映、多くの来場者が映像に見入っていた。「自分自身の朝ドラの記憶をたどることができた」「樹脂で作られたつらが面白かった」等、多くの感想が寄せられた。

■思い出の「連続テレビ小説」十六選

「NHK連続テレビ小説『なつぞら』&『朝ドラ』100展」に合わせ、「思い出の『連続テレビ小説』十六選」と題した「番組を視聴する会」第6回を開催した。昭和と平成、それぞれの時代に放送された連続テレビ小説のうち、放送ライブラリーで公開している中から8本ずつを選び、上映した。上映作品は次のとおり。

昭和八選＝『娘と私』『おはなはん』『旅路』『あしたこそ』『鳩子の海』『雲のじゅうたん』『おしん』『澁つくし』/平成八選＝『和っこの金メダル』『ひらり』『ふたりっ子』『あすか』『どんと晴れ』『ちりとてちん』『ゲゲゲの女房』『カーネーション』。

期間中の6月15日と7月6日には、レコード鑑賞会を実施。主題歌やテーマ音楽40曲を、放送当時の番組情報誌などととも紹介した。

■理事会・評議員会を開催

【第1回理事会】

5月31日開催の第1回理事会で、平成30年度事業報告ならびに収支決算案、令和元年度定時評議員会の議案を承認した。また、令和元・2年度の放送番組収集諮問委員会委員10名と委員長、委員長代理をそれぞれ決定した。このほか、番組視聴システム更新に向けた検討状況や、本年度保存対象番組の選定などを含む番組保存委員会報告を了承した。

【定時評議員会】

6月18日開催の定時評議員会で、理事の選任、ならびに平成30年度事業報告、収支決算案を承認した。ライブラリー事業の現況報告に対して、番組の教育利用の充実を期待する意見が多く述べられた。

◇平成30年度事業報告の概要

平成30年度は、29年度に決定した「次期5年間（平成30～34年度）の事業方針」および当期事業計画に基づ

き、「公開番組の一層の増加」「事業の全国展開」「放送事業者の理解・協力の推進」を重点項目とし、収集対象番組の選定方法の見直しや権利者との協議、公立図書館や大学への働きかけを進めるなど、事業を取り巻く環境変化に的確な対応をはかり、放送ライブラリー事業のさらなる進展に注力した。

財政においては、29年度に策定した「今後の運用方針」に則り、債券運用利率2%以上を維持すると共に、基本財産を額面99億円から100億円に積み増した。民放とNHKの出捐金は、29年度に引き続いて24年度比30%減の総額1億6,170万円が継続された。

◇番組の収集・保存・公開

年度内に収集・保存した番組数はテレビ936本、ラジオ127本で、公開した番組数はテレビ402本、ラジオ100本である。過去に遡って体系的に収集する番組として、未保存の芸術祭賞受賞番組について収集に着手した。

◇事業の全国展開

サテライトライブラリーは新たに宮崎

市立図書館などを加え合計7施設での運用となった。大分県立図書館など3か所では上映会形式の利用があった。大学での公開番組の利活用は8大学で延べ47本の番組が利用された。

前年に続き、11月には上智大学で、番組の利活用に関する今後への期待と現状の課題を討議するセミナーを開催した。また、広島、長崎、仙台の3地区で、民放・NHK合同上映会を実施した。

◇放送文化に対する理解促進

企画展、上映会、公開セミナーを中心に、夏休みの体験教室など放送事業者と連携した取り組みを行ったほか、広報面では法人を紹介する便覧の作成やSNSの活用、リーフレット配布などによる幅広い周知に努めた。

◇番組視聴システム更新への対応

令和2年度に予定する番組視聴システムの更新に向けてプロジェクトチームを設置し、システムの現状分析や次期システムのコスト面、技術面の課題整理を進めた。

■図書館および大学での番組利活用

〔新潟大学附属図書館〕

4月18日より館内に個別視聴ブースが常設され、新潟県に関連する人物や出来事などを扱ったテレビ番組32本の視聴が開始された。

〔東京工芸大学〕

2019年度前期、芸術学部「放送史Ⅰ」（丁智恵助教）の授業で『社会探訪 [46] 浅草のジャングルに行く (1) ある民生委員の日記から』（1949/NHK ラジオ）、『光子の窓 イグアノドンの卵』（1960/日本テレビ）などテレビ番組5本、ラジオ番組2本が利用されている。

〔椋山女学園大学〕

2019年度前期、文化情報学部『メディア情報分析』（太田智己講師）の授業に『ドキュメント湾岸戦争・開戦から10日』『湾岸戦争・43日の全記録』『タイス夫妻の戦争 アメリカ兵捕虜家族の記録』（すべて1991/NHK）

のNHKスペシャル3本が、同学部「メディア文化論」（同）の授業に『きょうの料理 50年 時代を映す懐かしの100レシピ』（2007/NHK）が、それぞれ利用されている。

■上映会での利活用

4月20日、市川森一脚本賞財団主催の企画「テレビドラマの巨人たち～人間を描き続けた脚本家 第3回『早坂暁 ひと、その存在や いかに』」が千代田放送会館で開催された。同企画を共催する放送番組センターは、早坂暁作品『ドラマ人間模様 冬の桃 [1]』（1977/NHK）と『月曜ドラマスペシャル 今夜もテレビで眠れない 第3話 猫坂の上の幽霊たち』（1995/TBS テレビ）を横浜からストリーミング送信し、上映した。上映後には、出演者と制作者が早坂暁作品の魅力を語るシンポジウムが行われ、120人が参加した。

■ジャパンサーチ試験版 公開開始

2月27日に分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」の試験版が一般公開された。「ジャパンサーチ」は、内閣府知的財産戦略本部が進めるデジタルアーカイブジャパンの実現に向けた取り組みの一環であり、書籍、文化財、メディア芸術などの各分野のデジタルアーカイブと連携し、日本の多様なコンテンツのメタデータをまとめて検索できるポータルサイトである。試験版公開開始時で10機関36データベースと連携しており、約1700万件のメタデータを検索できる。放送番組センターは、放送ライブラリーで公開中のテレビ・ラジオドラマの番組名、放送局名など7項目のファクトデータを提供している。

「ジャパンサーチ」は2020年の正式版公開を目指し、試験版利用者からのフィードバックを踏まえた機能整備が進められる。

■2019.3～5の新公開番組

〔テレビ番組〕

『みんなのドキュメント トンネルマンがみた夢 新幹線に託したもの』

2016.4.23 / 北海道文化放送

『YTSスペシャル 希望の一滴』

『希少難病に光! ここまで来た遺伝子治療』

2016.8.8 / 山形テレビ

『NHKスペシャル 足元の小宇宙』

『～生命を見つめる植物写真家～』

2013.7.6 / NHK

『おしゃべリアパート』

2016.5.21 / テレビ金沢

『ザ・ドキュメンタリー 助産院』

『～親子がうまれるとき～』

2016.9.22 / テレビ大阪

〔ラジオ番組〕

『FMシアター ふたりの娘』

2016.1.9/NHK

『YBSラジオスペシャル サティアンの』

『記憶 オウム真理教が残した平成の傷痕』

2018.5.15 / 山梨放送

このほかテレビ199本、ラジオ61本。

◆新公開番組 PICKUP!◆

SBCスペシャル 鶴と亀とオレ

2016.5.30 / 信越放送

ディレクター：上條正正

プロデューサー：池上英樹

長野県飯山市に住むフリーカメラマンの小林直博さん（24歳）は、「鶴と亀」という一風変わったフリーペーパーを発行している。載っているのは農作業に精を出すおじいちゃんや、地元の商店で買い物をするおばあちゃん。日常の生活を送る、普通のお年寄りの写真が「スタイリッシュでカッコいい」とネット上で評判になり、東京のフリーペーパー専門店で購入状態になるほどの人気だ。一度は憧れの東京に出たものの田舎に戻り、お年寄りを撮り続ける小林さんの地元への想いと、ユニークな作品作りの裏側を追った。

過疎化や高齢化に悩む飯山市。それで

も小林さんが「鶴と亀」を作った理由は「ここ（飯山）で死ぬまで生活していきたい。“超おもしろい”と思っている地元の人たちを発信していきたい」という気持ちが生まれたからだった。小林さんは、気負うことなくお年寄りの懐に入り、油断した一瞬の表情を逃さずシャッターを切る。自分の好きなヒップホップやストリートカルチャーをお年寄りたちに見出す。彼らをリスペクトしているからこそ、魅力的な写真になるのだ。また、フリーペーパー作りに協力する地元の方は、「新しいことをやりたいという若者が地元において嬉しかった。自分たちもそうやってきたから応援したい」と言う。小林さんの活動を、皆が楽しんで協力している姿に、地域発信の無限の可能性が感じられる。第64回日本民間放送連盟賞エンターテインメント番組最優秀受賞。

◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組16,830本 / ラジオ番組4,503本 / テレビ・ラジオCM11,382本 / 劇場用ニュース映画2,683項目（2019.6.30現在）